



## 西トップ遺跡調査修復 中間報告 10

### —中央祠堂基壇部再構築編—

*Survey and Restoration of Western Prasat Top Interim Report 10*

*Reassembly of the Platform of the Central Sanctuary*

奈良文化財研究所

2021

# 目次

## 第1章 西トップ遺跡調査修復事業10年目を迎えて

第1節 西トップ遺跡の調査	1
第2節 修復に至る経緯	2
第3節 南祠堂の修復	3
第4節 北祠堂の修復	6
第5節 中央祠堂の修復	10

## 第2章 中央祠堂調査修復事業の概要

第1節 工事の進捗	12
第2節 アンコール保存事務所からの装飾石材の返還	16

## 第3章 西トップ遺跡中央祠堂開口部に関する検討

1. はじめに	20
2. 中央祠堂の石材	21
3. 問題点	25
4. 美術史的研究	27
5. 結論	28

#### 凡例

1. 本報告書は奈良文化財研究所が令和2年1月から令和2年12月にかけておこなった、西トップ遺跡中央祠堂基壇部の調査修復の記録、第10冊目である。
2. 解体修復に際しては、現地文化財保護当局である APSARA（アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備局：Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap）の全面的な協力を得るとともに、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JASA）の技術的な支援を受けた。
3. 本書は解体修復に直接関わった企画調整部佐藤由似、現地調査員 Sok Keo Sovannara、客員研究員杉山洋が関係する研究員の助言を受けながら執筆と編集に当たった。図版の写真は上記担当者と現地のカンボジア人スタッフの撮影による。
4. 今後、解体修復の進捗状況に合わせて、隨時、各報告を上梓したい。

## 第1章 西トップ遺跡調査修復事業 10年目を迎えて

2021年、西トップ遺跡調査修復事業は開始から10年目の節目の年を迎えた。これまでの多くの方々のご支援・ご協力によって、順調に調査修復事業を推進することができている。本章では、当修復事業の推移を順を追って記すとともに、これまでの当事業で判明した西トップ遺跡に関する新たな知見をまとめる。

### 第1節 西トップ遺跡の調査

平成13年度、奈良文化財研究所はタニ塗跡に続く新たなカンボジア事業の調査地に探し、現地の文化財保護組織 APSARA (アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備機構) と協議をおこなった。遺跡の選定にあたっては、当時 APSARA の遺産局長であったアン・チュリアン氏と協議を重ね、アンコール・トムの遺跡群の中でも遺跡存続年代が比較的長く、仏教的な要素も濃い遺跡として、西トップ遺跡（第1図）を調査対象地として選定することになった。

西トップ遺跡は、アンコール・トムの中心、バイヨンから西門へ至る東西道路を西へ500mほど進み、さらに南へ50mほど下がった位置にある。これまでその存在は知られていたが、詳細な調査研究がなされていなかった。アンコール王朝の局勢期であるバイヨン期よりも後世のアンコール・トム内の遺跡のあり方や、アンコール王朝滅亡後の、ボスト・アンコール期をも対象に含める広範囲な時代設定の元に調査を開始した。平成15年（2003）8月の第1次発掘調査を皮切りに銳意調査を進め、平成22年度にはそれまでの調査結果をまとめ、日本語版と英語版の報告書を刊行した（1、2）。

(1) 奈良文化財研究所 2011 「奈良文化財研究所学報88 西トップ遺跡調査報告－アンコール文化遺産保護共同研究報告書－」

(2) Nara National Research Institute for Cultural Properties, 2012 *Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site.*



第1図 西トップ遺跡修復前全景（東から）

## 第2節 修復に至る経緯

2008年5月26日、中央祠堂東側破風部分の石材40個あまりが落下した。その前々年にカンボジア側により中央祠堂頂部に繁茂していた樹木が伐採されたために、樹根が抱えていた石材が不安定となり、崩落したとみられる。この石材落下に伴ってかろうじて均衡を保っていた中央祠堂上部の石材が全体が不安定化した。急遽、APSARAと協議を重ね、日本国政府アンコール遺跡国際調査団（JASA）のご協力を仰ぎ、中央祠堂に足場材を架けて、祠堂本体を支えることとした（第2図）。APSARA、奈良文化財研究所をはじめとする国内外の関係者による協議を経て、独立行政法人次期第3次中期計画（2011年度から2015年度）より修復工事に着手することが決定された。修復の決定にあたっては（株）タダノと飛鳥建設株式会社をはじめとした多くの方々のご協力が大きな原動力となった。2008年、（株）タダノからは修復に不可欠な16tラフテレンクレーンをはじめ、スーパーデッキ、カーゴクレーン付きトラックのご提供を受けた（第3図）。飛鳥建設株式会社からは発電機など機材のご提供だけなく、（株）タダノとの調整、解体作業開始後は石材の加工や接着に関する技術指導をいただいた。

修復開始にあたっては、中央祠堂と比べ小型の南北両祠堂から着手することにした。南北両祠堂では、南祠堂の方が躯体部の残りが良好であるとともに、石材が大きく解体の手間が北祠堂と比べ少ないと推定されたため、南祠堂の解体修復で工法・進行等の習熟度を高めた後、続いて北祠堂、中央祠堂の順に解体修復を進めることとした。2011年度後半からは、解体修復に必要な現場設備の準備・整備を進めた。2011年12月14日にAPSARA・東京文化財研究所・奈良文化財研究所間で新たな覚書を交わし、2012年3月9日より解体作業を開始した。



第2図 足場材設置状況（東から）



第3図 寄贈機材

### 第3節 南祠堂の修復

#### 南祠堂軸体部・上成基壇の解体

南祠堂は軸体部・上成基壇・下成基壇からなる（第4図）。屋根にあたる屋蓋部はほとんどが失われ、軸体部は南に約19度傾いていた。上面から順に1層ずつ平面図作成、石材番付、解体を繰り返し、軸体部の解体を進めた。解体した部材は、地上のコンクリートベース上で組み上げ、仮組をおこない、水平や位置調整、欠損石材などの確認をおこなった。

続く上成基壇解体時には、転用石材を複数確認した。中でも特筆されるのが、シーマ石（結界石）と呼ばれる石材が構造材として転用されていたことである。通常、シーマ石は上座部仏教寺院の寺域を区画するために地中に埋められるもので、寺域の東西南北の四隅とその各辺の中央部に設置される。シーマ石は2石1組として据え付けられるため、合計8か所に2石ずつ各寺院に設置されることが通例である。南祠堂では上成基壇から12点、続く下成基壇最下層からも2点のシーマ石（第5図）が発見された。おそらく、元来どこかの寺院に据えられていたものを、南祠堂の構造材として転用されたものと考えられた。



第4図 南祠堂修復前状況（東から）



第5図 南祠堂下成基壇最下段（N24）検出シーマ石（南から）

#### 南祠堂基壇部の解体

下成基壇最上面は砂岩敷石面であったが、不等沈下を起こし、中央部から南にかけて20cm以上沈下した状態であった。敷石面を解体すると、基壇内に充填されていた基壇土が赤褐色の粗砂であることが判明し、また版築のような基礎構造は見られなかった。この基壇土を発掘すると中央祠堂下成基壇の南階段が検出された（第6図）。

#### 検出された中央祠堂下成基壇南階段

この中央祠堂下成基壇の南階段は状態もよく、不等沈下は起こしていなかった。のことから、南祠堂軀体部の傾斜の原因が判明した。経年変化などの原因により、南祠堂下成基壇外装のうち南西隅の羽目石が崩落、隙間から基壇土が外側に流出し、基壇中央部の沈下が起った。一方、中央祠堂南階段に載っていた南祠堂北側は沈下することはなかった。そのため、軀体部全体が南に傾斜するとともに、屋蓋部の倒壊が起ったと推定された。また基壇土内からは青銅製鏡や陶磁器片など数点のみが出土した。検出された中央祠堂下成基壇南階段は、再構築の際に再び埋め戻すことになるため、最大限の記録採取に努め、実測、3D測量と写真撮影をおこなった。



第6図 中央祠堂下成基壇南階段検出状況（南から）



第7図 南祠堂基礎地盤検出状況（南西から）

#### 南祠堂基壇の基礎地業

解体と並行して基壇外周部で発掘調査をおこなった。基壇西側に幅1m、長さ3mのトレンチを設定し、掘込地業の確認をおこなったがこの部分では掘込は確認できなかった。その後、現地表下約2mまで掘り進めたが、遺物の出土が続き、地山の確認には至らなかった。このことから、西トップ遺跡では遺跡の立地する範囲を少なくとも2m以上の盛土で整地した上に現在の伽藍を建立していることが明らかとなった。

基壇部最下層の調査では、現基壇の南側延石直下から基礎の掘込地業が確認されるとともに、石列が検出された(第7図)。これらの石列は砂岩またはラテライトブロックを縦置きに並べ、東西南北に組み合わせて作られていた。また掘込地業南掘込線のすぐ南から、黒褐釉長頸壺と無釉陶器の丸底壺・長頸壺などが出土した。一部掘込地業の深さを確認する断削トレントを南北方向に入れたのちに全体を埋め戻し、再構築をおこなった。

#### 南祠堂基壇の再構築

2014年10月からは基壇下の地業部から再構築に取り掛かった。再構築にあたっては、基礎地業や基壇内に充填されていた赤褐色粗砂層の地質調査成果に基づいた改良土を用いて、版築をおこない(第8図)基壇土の強化を行った。

2015年9月23日には、無事南祠堂の調査修復を完了し、南祠堂の再構築完成の式典を挙行することができた。南祠堂屋蓋部に関しては、東面と北面の破風下端の枠材部分まで再構築をおこなった(第9図)。調査の詳細については、修復報告2を参考されたい(3)。

(3) 奈良文化財研究所、2015、「西トップ遺跡調査修復中間報告 南祠堂解体編2」



第8図 南祠堂再構築作業状況



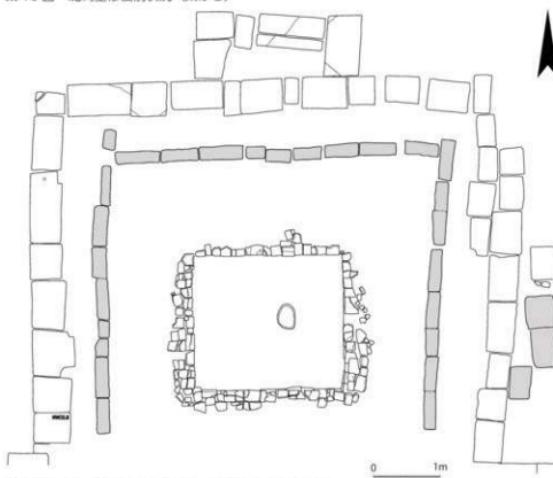
第9図 南祠堂再構築状況（東から）

#### 第4節 北祠堂の修復

2016年2月、北祠堂の解体に着手した（第10図）。北祠堂は全体が北側に倒れこんでおり、躯体部の崩壊が南祠堂と比べてより進んでいた。躯体部の一部の石材は落し躯体部内部に残されていたが、その他の多くの躯体部の石材はフランス極東学院により地上に整理され、特に北祠堂北側に雑多に置かれている状態であった。修復作業に先立ち、その石材一つ一つに番付をおこない、図面を作成とともに、その石材が本来はどこに置かれていたかという原位置の特定をおこない、再構築に備えた。



第10図 北祠堂修復前状況（東から）



第11図 北祠堂基礎段下段・レンガ造遺構上面平面図

### 北祠堂基壇部の解体

2016年3月に躯体部の解体が終了したのち、基壇部の調査に取りかかった。基壇部は北側に沈下しているものの旧状をとどめており、この段階で基壇の築盛状況などを知るために、基壇敷石を一部外し、南北にトレンチを設定した。その結果、基壇土は南祠堂と同じ赤褐色の粗砂を中心とするものの、所々に灰色粘土を交えて、厚さ約10cmの整地を繰り返すような築成方法をとっていたことが判明した。さらにこのトレンチの底からレンガ列が検出され、基壇下面に何らかのレンガ造遺構が存在することが推定された。

### レンガ造遺構の発見

2016年7月に入り基壇部の解体を進めるとともに、レンガ造遺構の構成を明らかにするために、次は東西方向のトレンチも設定し、十字トレンチでレンガ列の状況の調査をおこなった。続く発掘調査で、レンガは一辺約2mの方形にめぐることが明らかになり（第11図）、南祠堂とは違う何らかの地下遺構の存在が推定された。8月にこのレンガ造遺構内部の埋土を発掘するとともに（第12図）、写真撮影、実測、3D測量等をおこなった。その結果、これまでのアングル遺跡群では例を見ない特殊な遺構を検出・調査することになった（第13図）。当レンガ造遺構からは、金製品をはじめとした金属製品、水晶、ガラス製品、焼骨片などが出土した。また、レンガ造遺構ならばに出土遺物に被熱の痕跡が認められ、多くの炭化物の出土も確認した。この結果、当レンガ造遺構は14世紀後半から15世紀前半に位置付けられることが判明した。当該遺構ならびに出土遺物の分析結果に関する詳細は、修復報告5を参照されたい（4）。

（4） 奈良文化財研究所、2018、「西トップ遺跡調査修復中間報告5 北祠堂レンガ造遺構編」



第12図 レンガ造遺構発掘作業風景



第13図 レンガ造遺構出土状況（南から）

### 北祠堂偽屏の再構築

レンガ造遺構に関して詳細な調査をおこなった後、遺構保存のためにオリジナルの赤褐色粗砂を主とした改良土で埋め戻し基壇の再構築に取りかかった（第14図）。軸体部再構築にあたっては周囲の散乱石材から当初部材を発見し、元の場所に納めることを目指した。その過程で、軸体部の東正面を除く3面の偽屏と呼ばれる屏全てに如来立像があらわされることが判明し、それらを再構築することができた。

もともと、西面と南面の偽屏については、20世紀初頭のフランス極東学院の記録によってその存在が知られていたが、我々が現地に入った2000年代には既にその当時の現状を留めていなかった。

西面は如来立像下半身が現地に、上半身はアンコール保存事務所に収蔵されていた。文化芸術省のご高配を得て、2016年4月にアンコール保存事務所から西トップ遺跡現地に上半身を運び入れ、西トップ現地に残っていた下半身と組み合わせ復元した（第16図）。

南面はかろうじて如来立像の足部のみが原位置に残っており、それをもとに散乱石材中から上部を探し出し、復元することができた（第17図）。一方、大きく倒壊していたため古写真的記録にも残らず、その图像を全く推定できなかつた北面の如来立像は、散乱石材の詳細な調査によって全身を復元することができた（第18図）。興味深いことに、北面の如来立像は、南面・西面とは様相を異にし、通常の立像ではなくいわゆる遊行仏に近い图像であることが判明した。

### 北祠堂の再構築

2017年8月には北祠堂の基壇部の再構築が終了し、軸体部の再構築を進めた。北祠堂は南祠堂と比べ軸体部の崩壊の度合いが大きく、周囲の散乱石材から多くの部材を探し出す必要があった。現地での詳細な調査により散乱石材から多くの石材を北祠堂に設置することが可能となったが、それでも発見できない、または破損のため再構築に耐えられない部材に関しては、新しい砂岩材で補完した（第15図）。2017年12月、全作業を完了した（第19図）。



第14図 北祠堂下成基壇再構築作業風景（北西から）



第16図 北祠堂西面偽屏再構築状況（西から）



第15図 北祠堂ペディメント新材彫刻作業風景（東から）



第17図 北祠堂南面偽屏再構築状況（南から）



第18図 北祠堂北面偽屏再構築状況（北から）



第19図 北祠堂再構築状況（東から）

## 第5節 中央祠堂の修復

2018年1月より中央祠堂の解体調査を開始した。これまでの南祠堂、北祠堂と同様に上部から順番に解体した。中央祠堂は他の2祠堂に比べて規模が大きく、屋蓋部から順番に慎重に外した（第20図）。解体した石材は、順次仮組をおこなった。2018年8月から9月にかけては、基壇部上面の敷石と扉枠の精査をおこない、10月には扉枠を解体した。これら解体した全ての躯体部の部材を組み合わせ、コンクリートベース上の躯体部の仮組が完了した。

### 中央祠堂基壇部上面の調査

2018年8月には躯体部が解体された上成基壇部上面の調査をおこなった。基壇部上面の砂岩敷石は中央部に転用石材と思われる方形石材がはめられ、そこが不等沈下を起こし、不揃いとなっていた（第21図）。この敷石を外すとラテライト敷石があり、やはり中央部に石の乱れた個所の存在を確認した。その部分を発掘調査した結果、ラテライト敷石の下にさらに3段分のラテライト敷石が存在し、その中央部にラテライト敷石を破壊して盗掘孔と思われる縦穴が穿たれていることが判明した。アンコール遺跡群の諸遺跡によくみられる塔中央の盗掘孔と考えられ、ここからは近代の針金などが出土した。深さ2m余りまで調査を継続したが盗掘孔は続いており、調査の安全と基壇の耐荷重性を考え、この時点で調査を終えることとした。盗掘孔内には砂岩やラテライトが乱雑に埋め戻されていたが、発掘調査後の埋め戻し時には改良土で埋め戻し、上部荷重に耐えられるよう処置をおこなった。



第20図 中央祠堂修復前状況（北東から）



第21図 中央祠堂上成基壇上面敷石面検出状況（北から）



第22図 中央祠堂ラテライト基壇調査風景（北東から）

#### 中央祠堂基壇部の解体

基壇部の解体には、いくつかの課題があった。そのうち最も重要な課題は、20世紀前半にフランスのアンリ・マルシャルによって提唱された説で、「外側の砂岩外装の内側にまた別のラテライト基壇が存在する」ことであつた(5,6)。実際、奈良文化財研究所による建築調査においても中央祠堂基壇の砂岩外装の内側にラテライト基壇が存在することが確認されていた(第22図)。そのため、調査の手順として、砂岩外装のみ順次1/4ずつ解体し、露出したラテライト基壇の調査をすることとした。まず東南1/4を部分的に解体してラテライト基壇の残存状況を確かめ、その後、西南、北西と解体を進めていった。

#### 中央祠堂ラテライト基壇

ラテライト基壇は上述の通り1/4ごとに解体を進め、その都度写真撮影と3D測量をおこなった(第23図)。その結果、ラテライト基壇も外装の砂岩基壇と同様に上成、中成、下成の3段構成であった。上成基壇と下成基壇はモールディングの少ない石材を組み合わせ、下成基壇では延石2段、地覆石1段、羽目石3段、葛石1段で構成されていることが判明した。中成基壇は羽目石の中段に丸みを帯びて突出するモールディングが施されていた。

#### 中央祠堂の再構築

中央祠堂基壇部砂岩外装の解体は順調に進み、2019年秋にはラテライト基壇の北面から東面を含めた全面が明らかになった。ラテライト基壇は解体せず、一部補修をおこなうことにどめた。オリジナルの基壇を保存するため、ラテライト基壇の3D測量、写真撮影などできうる限りの記録保存をおこなった。また、同時に進めていた東正面の仏像台座と仏教テラスの発掘を経て、仏像台座の再構築をおこなった。その後、中央祠堂基壇部の再構築を進め、2021年1月段階で軸体部の再構築作業を続けている状態である。

(5) Marchal, Henri. 1918. "Monuments Secondaires et Terrasses Bouddhiques d'Angkor Thom". *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*. Tome 18 (8). 1-40.

(6) Marchal, Henri. 1925. "Notes sur le monument 486 d'Angkor Thom". *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*. Tome 25 (3-4). 411-416.



第23図 中央祠堂ラテライト基壇検出状況（北東から）

## 第2章 中央祠堂調査修復事業の概要

### 第1節 工事の進捗

西トップ遺跡の調査修復事業は、2019年12月段階で、中央祠堂下成基壇の再構築が終了し、中成基壇北東部を除きほぼ再構築作業が完了している状態であった。2020年1月から2月にかけて中成基壇再構築を完了し、3月から7月にかけては上成基壇の再構築をおこなった。8月には中央祠堂基壇と東正面に位置する仏像台座との取付部の再構築を進めた。

軀体部にかかる工事においては、仮組のち、再構築作業をおこなっている。施工順としては、東西南北の各面の開口部を立ち上げたのち、各開口部間の壁面を順次組み上げることとした。9月から12月にかけて四面の開口部に当たる扉部分の仮組、再構築、11月には東面から南面開口部にかけての壁面の再構築を始めた。



第24図 中央祠堂基壇再構築作業風景



第25図 中央祠堂基壇再構築作業風景



第 26 図 中央祠堂基壇再構築状況（東から）



第 27 図 中央祠堂基壇再構築状況（北東から）



第28図 中央祠堂基壇部・軸体部再構築状況（東から）



第29図 中央祠堂軸体部扉柃再構築状況（東から）



第30図 中央祠堂躯体部廊柱再構築状況（南西から）



第31図 中央祠堂躯体部廊柱再構築状況（南から）

## 第2節 アンコール保存事務所からの装飾石材の返還

1970年代以降のカンボジア内戦中、また内戦後の混乱期には、アンコール遺跡群の装飾石材や神像、仏像などが盗難に遭う被害が発生した。そのため、カンボジア政府は、シェムリアップ市内に設立されたアンコール保存事務所(Conservation d'Angkor)に盗難の恐れのある石材や影像を各寺院から運び出し、収蔵・保管した。現在までに万を超える膨大な量の彫刻類が当事務所に収蔵されている。西トップ遺跡から多くの彫刻類が搬出され、今日に至るまで安全に収蔵されていた。

中央祠堂の修復・再構築に向けて、2018から2019年度にかけて、アンコール保存事務所において中央祠堂に関連する彫刻類の調査をおこなった。この調査により中央祠堂に関連するリンテル(楣石)、コロネット(側柱)、ペディメント(破風飾)などの彫刻類が収蔵されていることが判明した。オリジナル材を使わず新しい砂岩で代替材を設置するなどの案も考慮したが、オーセンティシティの観点から本来ある遺跡の姿に戻す方が優先されるべきであると考え、アンコール保存事務所に保管されていた彫刻類の一部を現地に戻すことをカンボジア政府側に打診した。これらリンテルなどの彫刻石材は、構造材としても再構築には必要不可欠な部材であり、オリジナルの装飾石材を原位置に据えることが重要であるという本事業の修復方針が認められ、2020年10月カンボジア文化芸術省大臣の承認を得ることができた。

これを受け、2020年10月14日、アンコール保存事務所より西トップ遺跡中央祠堂に属する装飾石材を西トップ遺跡へと移送した。移送作業にはアンコール保存事務所担当官、遺跡警察らが同行し、安全に西トップ遺跡まで



運び入れることができた。その後、接合・修復が必要なリンテルやコロネットなどの部材の修復作業を開始した。

一方、ペディメント材に関しては、西トップ現地に置かれていた他の部材と組み合わせの確認作業をおこない、図像の復元作業を進めている。修復が完了した部材は、中央祠堂の所定の位置へと再構築される予定である。

第32図 コロネットのアンコール保存事務所からの運び出し作業風景



第33図 アンコール保存事務所担当官による運び出し前確認作業

	Inv. No.	幅 (cm)	高さ (cm)	奥行 (cm)	タイプ	注記
	N332	16.5	116	14	コロネット	中央祠堂
	N333	19	100	16	コロネット	中央祠堂
	N423	140	48	40	リンテル	中央祠堂東面 ヤマナ ナンディン
	N424	42	48	35	リンテル	中央祠堂西面
	N425	75	47	36	リンテル	中央祠堂西面

表 1-1 アンコール保存事務所から返還された石材一覧

	Inv. No.	幅 (cm)	高さ (cm)	奥行 (cm)	タイプ	注記
	N435	18	46.5	36	ペディメント	ケンディ 蓮蓋、注口部 は鳥形か
	N437	34	25	16	ペディメント	触地印仏坐像 偏袒右肩
	N445	64	50	23	ペディメント	
	N446	90	40	19	ペディメント	棍棒を持った ヤマガ
	N451	52.5	20	36	ペディメント	仏坐像頭部

表 1-2 アンコール保存事務所から返還された石材一覧

	Inv. No.	幅 (cm)	高さ (cm)	奥行 (cm)	タイプ	注記
	N452	70	43	21.5	ペディメント	ケンディ 蓮蕾、注口部 は鳥形か
	N453	55	33	14	ペディメント	
	N454	20.5	38.5	19	コロネット	中央祠堂

表 1-3 アンコール保存事務所から返還された石材一覧

## 第3章 西トップ遺跡中央祠堂開口部に関する検討

ソク・ケオ・ソヴァンナラ

### 1.はじめに

三塔型式の寺院である西トップ遺跡の調査と修復作業から、新たな興味深い事実が判明した。興味深い発見といふのは、この三塔の建築の評価と造営過程に関するものである。これまでの先行研究における推定では、第1造営期が中央祠堂の内側ラテライト基壇が建立された9世紀後半から10世紀前半、第2造営期が砂岩造三祠堂建造の段階とされていた。この三塔の解体調査をしたところ、三塔は別々の時代に建てられており、この寺院の伽藍の建設には、およそ5つの段階があったと考えられることが判明した。

### 第1段階

西トップ遺跡で発見された碑文(K.576)によると(1)、ヤショーヴァルマン1世(889A.D.-910A.D.)の母方の叔父であるシュリー・サマラヴィクラマ(Cri Samaratrakrama)は、ヴィシヌ神に捧げるために、9世紀後半に寺院を建立したとされる。この寺院とは、中央祠堂内側に存在していたラテライト基壇にあると考えられる。この寺院の元々の塔はレンガ造(2)で、現存する3層のラテライト基壇上に建てられていたと考えられる。おそらく東面のみ開口し、灰色砂岩製の扉とコロネット(側柱)とリンナルで装飾されていた。寺院の塔部分はどこかの段階で倒壊したが、おそらく一部はラテライト基壇上に残っていたのだろう。このラテライト基壇全体は元位置かつ同じ高さを留めている(Fig.1)。



Fig.1 第1段階復元図案

### 第2段階

第二に、前段階の祠堂の倒壊後に建てられた、現在私たちが目にしている中央祠堂の段階である。灰色砂岩製の塔が先述のラテライト基壇上に(Fig.2)が建立された。その構造は、東西南北にそれぞれ階段を持つ塔として現在している。扉柱やコロネット、リンナルなどの装飾材は、赤色砂岩でできている。祠堂は、四方に開口し、これらの扉柱のほとんどは、赤色または淡い黄色の砂岩で造られているが、2材のみ灰色砂岩であった。これらの扉柱は明らかに再利用された石材のようであり、4面の扉柱は、赤色砂岩製のコロネットとリンナルとのセット関係となっている。上部のベディメントやフロントンには、触地印仏坐像と供養者像があらわされ、ポスト・バイヨン期またはボスト・アンコール期の様式を示している。

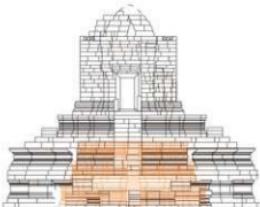


Fig.2 第2段階復元図案

### 第3段階

次の段階には、中央祠堂下成基壇南階段の上に南祠堂(Fig.3)が建立された。これは修復のため、南祠堂の軸体部・上成基壇を解体し、下成基壇内の発掘調査をおこなった際に、中央祠堂下成基壇の南階段が検出され、構築順が判明



Fig.3 第3段階復元図案

したことによる（3）。南祠堂には1つの開口部しかなく、他の3面は偽扉であった。この南祠堂にはコロネットやリネルは存在しないが、仏坐像があらわされたベティメントが4面に設置されている。

#### 第4段階

続いて、中央祠堂の北側に北祠堂（Fig.4）が建てられた。この祠堂の基壇内の状態から判断すると、中央祠堂下成基壇北階段を切断して撤去した後、北祠堂下成基壇の部材を積み上げ、中央祠堂下成基壇と連結させたようである。ところで、この北祠堂下成基壇内部とその地下の発掘調査では、砂で満たされたほぼ立方体の形をしたレンガ造りの地下室（4）が新たに発見された。この埋土中には、異なる種類の金属片やガラスビーズ、人骨と思われる骨片などが検出された。放射性炭素年代測定結果から、この北祠堂の年代は14世紀末から15世紀初頭と推定されている（5）。



Fig.4 第4段階復元図案

#### 第5段階

最後に、中央祠堂の東側に新たに上座部仏教のテラスが追加された。このテラスは、おそらく木造で、黒褐釉瓦で覆われていたと思われる（6）。



Fig.5 仏教テラス想定図案

西トップの寺院の変遷はこのように大変に複雑である。もう一つの問題は、屏枠、コロネット、リネルの赤色砂岩部材についてである。この点に関していくつかの疑問が出てくる。これらは、9世紀、10世紀の西トップの前身寺院に属するものなのか？それとも、周辺の他の寺院のもので、灰色砂岩の祠堂を建立するために持ち込まれたものなのだろうか？それとも、灰色砂岩の祠堂建設と同時に作られたものなのか？これらの疑問は、いずれもまだ説明が難しい問題である。しかし、これらの赤色砂岩については、ある程度の調査・観察は可能である。



Fig.6 東面屏枠（仮組中）

## 2. 中央祠堂の石材

中央祠堂の開口部は、屏枠、コロネット、リネルの3種類に分類することが可能である。

### 2.1. 屏枠

中央祠堂には、東西南北各方向に屏枠が存在する。それぞれ4部材から構成されており、合計16点の屏枠材がある。これらの屏枠はほとんどが赤色またはピンク色の砂岩で作られているが、南面屏枠の下枠材と北面屏枠の上枠材のみは灰色砂岩である。また、これらの屏枠の各部材のサイズや高さは均一ではない。これらの部材を注意深く詳細に観察することができたため、以下にその詳細を記す。

#### 2.1.a. 東面屏枠（Fig. 6）

東面屏枠はすべて赤色またはピンク色の砂岩で構成されている。下枠材、左右の垂直枠材、上枠材の4つのブロックで構成されている。左右

の扉枠材は、ほぼ同じ高さと厚さである。下枠は長さ、厚みともに短いが、幅は左右枠、上枠よりも広い。その内側には、木製扉と木杭のために開けられたほぞ穴が2か所切り込まれている。上枠材に関しては、下枠材よりも長く、とともにこの枠の北西端は、右側の垂直枠に取り付ける以前に既に折れていたものとみられる。我々の再構築作業にも東西扉枠の4部材は、互いに連結部の端部もほぼ完全に固定されていたので、この4部材は同時に製作され、設置されたと思われる。

#### 2.1.b. 西面扉枠 (Fig. 7)

西面扉枠の4部材は赤色砂岩で作られている。左右の垂直枠は高さ、幅、厚みが同じである。下枠に関しては他の部材よりやや薄いものの、幅は広くなっている。上枠の厚みは、南側と北側で異なっていた。この4つのパーフを再構築したところ、他の3か所の隅は位置正しく納まっているにもかかわらず、扉枠上部南隅が完全には固定されないことが判明した。上枠の南端部と右垂直枠の上端部の間に小さな隙間が生じるのである。これはオリジナル部材製作時の誤差か、別の扉枠を再利用したために生じた誤差である可能性が考えられる。

#### 2.1.c. 南面扉枠

南面扉枠の4部材は、左右枠、上枠は赤色またはピンク色砂岩製であるが、下枠は灰色砂岩製である。これは、赤色砂岩の枠材が3つ同時に作られ、下枠材のみ破損または欠損などの理由であたらしく灰色砂岩製で製作されてたことを示していると考えられる。さらに、灰色砂岩は非常に大きく、また厚みもあるものの、その材質は非常に悪く、脆い。我々の解体前に既に、多くの小さな破片に割れている状態であった。この4点の扉枠材を再構築したところ、左枠と上枠が完全には固定されておらず、上枠が約2cmの隙間が生じていることが判明した。

#### 2.1.d. 北面扉枠 (Fig. 8)

北面扉枠は5部材からなる。左右枠は赤色砂岩製で、サイズは同じである。下枠は2部材からなり、淡い黄色の砂岩でできている。この2部材からなる下枠は、左右枠のほぞに固定されないことから、作り替えられたものかまたは再利用されたもので、左右の垂直枠と連結させているように見受けられる。ほぞの大きさよりも切り込みが大きいため、施工者は切り込みとほぞの隙間を固定するために、繩やキーストーンなど小型の石材を詰め込まなければならなかったようである。

実際、この隙間にラテライトの小さな繩が入れられているのを見た。もう一点注目すべきは、我々の修復前に、この下枠2部材のうちの西側の部材がその先端で破損しており、その箇所に、別の部材を追加して補修されていた点である。また、北面扉上枠材は南面扉の下枠材と同じく灰色砂岩製であった。この灰色砂岩材は非常に脆く破損しやすいため、一部欠損していたが、修復により当該材を再び使用することが可能となった。

#### 2.2. コロネット (Fig. 9)

中央祠堂には各4面に2本ずつ、合計8本のコロネットが存在する。1924年のEFEO(フランス極東学院)の古写真(EFEO.CAM01477, 01484, 01489, 01496)によると、これらのコロネットはすべて原位置を留めていることが判明している。その後、塔は樹木や人の手によって損傷を受けたものとみられ、中央祠堂の東、西、北側の一



Fig.7 西面扉枠 (仮組中)



Fig.8 北面扉枠 (仮組中)

部が崩壊し、コロネットも部分的に破損した。1994年には、北側から2点、東側から2点の計4点の破損したコロネット材が収集され、シェムリアップ市内のアンコール保存事務所に収蔵された(Inv.312, Inv.332, Inv.333a, Inv.333b)。2020年10月には、これらのコロネット材を修復し、全てのコロネット材を原位置へと戻し、寺院を再構築するために、石材の返還をカンボジア文化芸術省に申請した(第1章第3節参照)。なお、この8本のコロネットは、明らかに大きさが違うようである。東面と西面のコロネットは同じ直径(0.185m × 0.185m)で、北面と南面のコロネットはより大きくて高い(0.22m × 0.22m)。

#### 2.2.a. 東面コロネット

東面の二本のコロネットは赤色砂岩でできており、高さ約1.70m、幅約0.185mを測る。柱の下部は断面四角形、本体部は断面七角形を呈す。七面体のうち、扉枠と軸部壁面に接する2面は無装飾であるが、他の5面に関しては装飾が施されている。南側のコロネットは3面のみに装飾、北側のコロネットは5面に装飾が施されている。

#### 2.2.b. 西面コロネット

西面の2本のコロネットは淡い黄色の砂岩でできており、高さは約1.74m、幅は0.185mを測る。柱の下部は断面四角形、本体部は断面七角形を呈す。東面同様、扉枠と軸部壁面に接する面は無装飾であるが、他の5面には装飾が施されている。この2本は同じ場所で作られたか、あるいは同じ場所から持ち込まれたものであると考えられるが、南側の柱は下部で折れて切断され、最終的には新たに接続部を追加してから設置されたものである。

#### 2.2.c. 南面コロネット

南面の2本のコロネットは薄紅色の砂岩でできており、高さ約1.86m、幅約0.22mを測る。東側のコロネットの下部は断面四角形、本体は断面七角形を呈す。一方、西側の柱は断面八角形を呈す。扉枠と軸部壁面に接する面は無装飾であるが、他の5面には装飾が施されている。

#### 2.2.d. 北面コロネット

北面の2本のコロネットはピンク色の砂岩製で、高さ約1.81m、幅0.21mを測る。柱の下部は断面四角形、本体部は断面七角形を呈している。扉枠と軸部壁面に接する面は無装飾であるが、残る5面のうち3面にのみ装飾が施されている。



Fig.9 東面コロネット  
(一部)



Fig.10 西面コロネット  
(一部)



Fig.11 南面コロネット  
(一部)



Fig.12 北面コロネット  
(一部)

### 2.3. リンテル

中央祠堂には全部で4点のリンテルが存在している。そのうち南、東、西面の三点は赤色砂岩製で、北面リンテルは薄黄色の砂岩でできている。しかし、北側のリンテルの表面には何らかの赤色塗料が塗られていたものとみられる。この四点のリンテルに描かれるモチーフは、本来のヒンドゥー教の神々が配置されるべき方角に合致していないことから、この中央祠堂建立時に再利用ないし再配置されたものと考えられる。

#### 2.3.a. 東面リンテル (Fig. 13)

東面リンテルは、長さ1.47m、幅0.40m、高さ0.49mを測る赤色砂岩で作られている。南辺は長さ0.07m、幅0.29m、高さ0.20mの接線が残っている一方、北側は直線を呈している。リンテルの北西の端は元々欠損しており、解体調査前に失われている。リンテルの正面には、ブレ・ループからパンテアイ・スレイ様式までにあたる装飾が施されている。中央部には、本来は常に北の方角を司るクベラ神が馬の上に坐す図像があらわされている。



Fig.13 東面リンテル

#### 2.3.b. 西面リンテル (Fig. 14)

西面リンテルは赤色砂岩で作られているが、当リンテルは3つほどに割れて破損したため、本来の大きさは不明である。リンテル中央部分は1994年頃に盗まれたとみられ、残りの2点（左部分、右部分）はアンコール保存事務所により収集され保存されている。これらの2点のサイズは、長さ0.50m、幅0.41m、高さ0.42m程度である。



Fig.14 西面リンテル（一部）

#### 2.3.c. 南面リンテル (Fig. 15)

このリンテルは、解体調査前まで原位置を留めていた部材である。長さ1.32m、幅0.465m、高さ0.425mの赤色砂岩で作られている。中央部には、獅子の上に座って右手に棍棒または剣を持した神像が表されており、ケトゥ (Ketu) 神であると考えられる。



Fig.15 南面リンテル

#### 2.4.d. 北面リンテル (Fig. 16)

EFEQの古写真によると、撮影当時には北面リンテルはまだ完全な形で残っていたが、おそらく1994年以前に破壊または落下により割れたとみられ、真ん中の部分はおそらく盜難により失われている。現在、残った部材を回収して修復を試みている。当リンテルは

淡い黄色または黄色がかった灰色の砂岩製で、長さ約1.57m、幅0.39m、高さ0.52mで、他の3面のリンテルよりも大きい。残存箇所に象の耳が表されていることを確認した。古写真との比較から、リントル中央部には象に坐す神像が表され、この神像は本来は東の方角を司るインドラ神であると考えられる。



Fig.16 北面リントル

### 3. 問題点

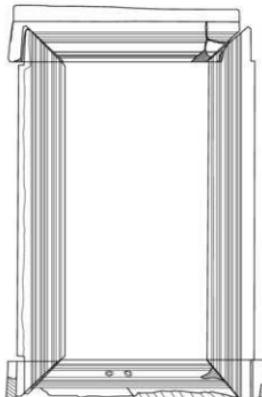
中央祠堂は、前身寺院の塔の倒壊後に建てられたことが既に判明していた。中央祠堂の全体構造やペディメントにみられる図像は、仏教寺院に関係するものであり、特にポスト・バイヨン期やポスト・アンコール期に比定できる。しかし、扉枠やその周辺の部材は別の寺院のもので、現在ある中央祠堂に転用されているようである。そのため、この事象を理解するにはいくつかの問題があるといえる。すなわち、これら扉枠周辺の部材は、中央祠堂と同時に作られたのか？もしそうでないならば、それらはいつ、どこに属していたか？この件に関しては、部材で確認することが可能である。

#### 3.a. 扉枠

各方向の扉枠のセットごとに、必ずと言っていいほど隙間補完に関連した問題が生じている。これらは、同時期に、同グループ、同セット関係で作られたものではないように見受けられる。他寺院の扉枠と比較検討すると、通常であれば、一組の扉枠（4つのブロックからなる）は、一定の大きさと角度でカットされ、また、切り欠きやはぞ穴とも合わせるように製作されるものである。

##### 3.a.a. 東面扉枠 (Fig. 17)

東面扉枠を再設置したところ、北側垂直枠材の高さに問題があることが判明した。垂直枠材と下枠の間には隙間があった。解体前調査で、この隙間に小さな砾や砂岩チップで充填されていたことを確認している。しかし、これら四つの枠材は完全に固定することができた。



##### 3.a.b. 西面扉枠 (Fig. 18)

西面扉枠の取付部を見ると、上枠南縁隅を除き、3隅は完全に固定されていたことが判明した。これは、3本の扉枠（左右垂直材2本、下枠1本）は同一セットまたはオリジナルの組み合わせであり、上枠材のみは別材を使っていたと推定される。

しかし、この4点の扉枠材は組み合わせることができた。そのため、この西面扉枠製作時に上枠材を切断したのは、他にも理由がある可能性が残る。

##### 3.a.c. 北面扉枠 (Fig. 19)

北面扉枠の上枠材と南面扉枠の下枠材は灰色砂岩材で作られていたのに対し、その他の扉枠部材は赤色砂岩製であった。この2点の灰色砂岩の扉枠材は、他の枠材よりも大きく厚みを持つ

Fig.17 東面扉枠実測図

ている。このことから、この2点の灰色砂岩の枠材は、おそらく破損した赤色砂岩に替えて、新たに作られたことを示唆している。北面屏枠の上枠材に関しては、切り詰めたうえで両垂直材と組み合せているが、装飾面に関してはノミで削り、斜めに傾斜させることで東側のコロネットとリンクルの高さに合わせるように調整している。

もう1点は、北面屏枠の下枠材に関してである。通常、各戸の下枠材はひとつの部材からなるが、北面屏の下枠材は2点の部材で構成されている。また、西側の部材の南東隅に関しては、設置前に欠損していたものとみられる。この点に関しては、破損部分の補修箇所の存在によって判明した。もう1つの問題は、西側の部材の切り込みに関してで、この切り込みは垂直材のほどよりもサイズが大きいという点である。垂直材を安定させるために、切り欠いたほど穴とその隙間にラテライト片が充填されていた。

### 3.a.d. 南面屏枠

南面屏の下枠材は灰色砂岩で作られていたが、他3点の枠材は赤色砂岩製であった。先に述べたように、これは下枠材が後から製作されたものであったことを示しており、厚みはあるが、他に比べて非常に脆く、砂岩の質が粗い。このため、当部材は多くの破片に破損し、剝離していた。

解体後、改めて確認をしたが、当下枠材は再構築には使用せず、新材に交換することとした。西側の垂直材は、東側の垂直材より若干長いものの、下枠材の西側の穴を若干調整することで納まりを解決することが可能である。

### 3.b. コロネット

中央祠堂には8本のコロネットが存在するが、それらはすべてが同じサイズではない。明らかに、東面開口部と西面開口部のコロネットは同じ幅、奥行きであるが、高さが異なっている。南面開口部と北面開口部のコロネットは同じサイズであるが、東面、西面のものよりも大きい。また、柱の角の大きさや数に問てもすべて同一というわけではない。

通常、コロネットは頂部、胴部、下部の3つに分けられる(Fig.20)。東面・西面・南面のコロネットはオリジナルの大きさで各部位も残っているが、北面コロネットに関しては、屏枠の高さと平行になるように頂部を切った痕跡が残る。

興味深いことに、我々の解体調査の際に、西面南側のコロネットは、設置以前に補修されていたことが判明した。また、当コロネット下部は、おそらく何らかの原因で折れ、高さ約38cmの別の部材が付け足されていた(Fig. 20)。上側のオリジナル材の下端にはぞ穴を開け、新しい部材はその上端にはぞをノミで成形することにより、双方を合体させているようである。

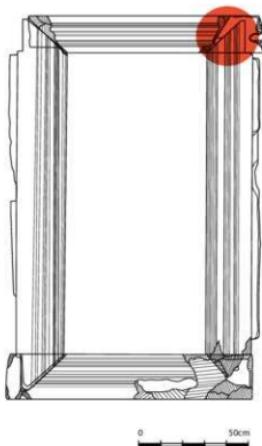


Fig.18 西面屏枠実測図  
(赤色部分は接合時の固定が完全ではない箇所)

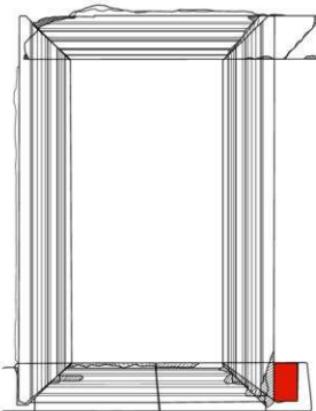


Fig.19 北面屏枠実測図  
(赤色部分は設置前欠損箇所)

### 3.c. リンテル

各4面の開口部にそれぞれリンテルが設置されているが、これらのリンテルは同じ大きさではない。一般的に、一塔を設計する際に、開口部の大きさは常に一定のサイズで設計されている。しかし、この中央祠堂では、すべての要素が不規則なサイズや方角を変更し、再利用されているようである(Fig. 21)。この再利用時の混乱というのは、リンテルにあらわされた神像の機能と方位性とも関連している。通常、象の上に坐す神像はインドラであり、東の方向に配置されなければならない。しかし、中央祠堂では、インドラ神があらわされたリンテルは北面に配置されている。これは本来的には誤った配置となる。つまり、誤った理解によるものまたは、当時の建設者たちが以前のリンテルの機能に関心を持っていなかったことに由来するのであろう。反対に、東側リンテルには北を司るクベラ神があらわされている。南側のリンテルには、獅子の上に座るケトゥと思われる神像があらわされているが、クメール美術ではリンテルに彫られていることはほとんど見受けられない。通常、南の方角を司る神はバッファローの上に坐すヤマ神である。



Fig.20 西面開口部南側コロネット

### 4. 美術史的研究

上述のこれらの問題の答えを見つけるためにには、まず、その芸術と様式との関係性に焦点を当てる必要がある。これは、リンテルやコロネットの様式についても同様である。以前、フランス人研究者がこれらのリンテルの研究を行い、その第一の結論は、基本的にパンテアイ・スレイ様式に比定できるとし、リンテル、コロネット、扉枠などは当様式に該当すべきものや装飾が確認できる。

#### 4.1. リンテル (Fig. 22)

- 上端の欠落 (図中①)
- 下端の欠落 (図中②)
- 中央のメダイオンから外側に向かって弓なりの弧を描いて、ハンサ (白鳥またはガチョウ) (訳註) の尾としてあらわされる (図中③)
- ライオンの頭から、花房を吐き出す (図中④)
- 花網がカタツムリの殻のようにまわる (図中⑤)

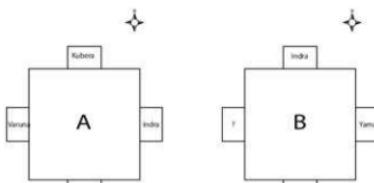


Fig.21 ヒンドゥー教モチーフのリンテルの配置  
A: 通例、B: 西トップ

Lintel of Western Top



Lintel of Banteay Srei



Fig.22 西トップとパンテアイ・スレイのリンテルの比較

- 中央部で弓なりの弧の先端でリング状のマクタ（冠）で結わわれている（図中⑥）

#### 4.2. コロネット (Fig. 23)

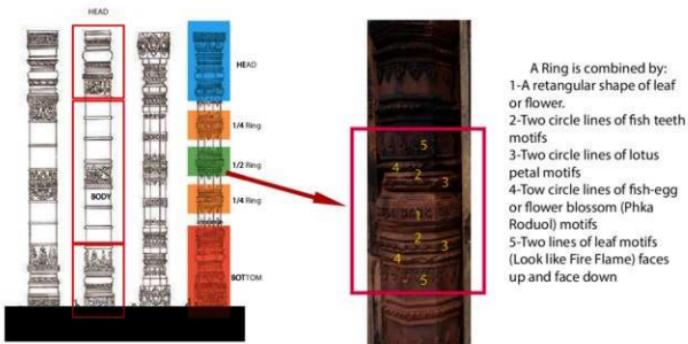
- 西トップ寺院とバントエイ・スレイ寺院のコロネットにはいくつかの類似点がある。
- ほとんどのコロネットが7面または7ヶ所の角を持つ
  - コロネットは頂部、胴部、下部の3パーティに分かれる
  - 頂部は、蓮の花弁と魚卵のモチーフで装飾された複数の帯状に装飾される
  - 胴部は、帯状の装飾を境に3つの部分に分かれる
  - 带状装飾では、菱形の花文様帶、2条の花蕾文、下向きと上向きの葉文帶各1条が巡らされる
  - 頂部と下部は同じ文様で装飾されている
  - 下部は断面四角形を呈し、窓内に折りを掛けた人物像があらわされている



Fig.23 西トップとバントエイ・スレイのコロネットの比較

#### 5. 結論

本稿は、これらの部材に関する概報であり、また初步的な研究である。今後更なる調査を進めることによって、当該石材の機能や由来を本質的に追究することができるだろう。また、赤色砂岩部材と中央祠堂全体の構造に関する確固たる建築過程の解明には、より多くの証拠が必要である。しかし、これらの赤色砂岩部材の由来を特定する



(Black Drawing: J. Bonnecier (1966), Le Cambodge, Tome I, Paris, p.161.)

Fig.24 コロネット装飾概要

ために使用できる情報はほとんどないということもまた事実で、以下のような疑問が生じる。

### 1. 9世紀、10世紀の前身寺院のものだったのか？

これらの部材はおそらく9世紀や10世紀の前身寺院に属するものではなかったであろうと言える。なぜならばそれは、かつての前身寺院の塔が事故的に、あるいは自然に崩壊した場合には、屏柵が完全な形を保ったまま倒れることはないと考えられるからである。また、特にリントルに言えるが、元位置から取り外し、別の方向に変えることも考えにくい。北側のコロネットに関する限りでも同様で、屏柵の高さに平行に切断されることはない。

### 2. 元々これららの部材は、周辺の他の寺院に属していたものであり、灰色砂岩の中央祠堂建立時に使用するために持って来られたのか？

この点に関しては可能性があると言えるだろう。アンコール・トム周辺にはいくつかの寺院跡がある。これらの寺院は既に崩壊しており、屏柵周辺の石材は赤色砂岩である。例えばアンコール・トムの城壁の北西約3kmに位置するプラサート・スララオ（スラロア寺院）などがそれに該当する。4面の開口部を持つ祠堂1基を建設する際、建立者は幅や高さなどがそろった開口部を建立する必要があるだろう。しかし、西トップ中央祠堂の屏柵材は先述の通り、おおよそ異なっているのである（屏柵材の詳細はFig. 25～36を参照）。

### 3. 灰色砂岩の中央祠堂の建設と同時に作られたのか？

北面屏の上枠材と南面屏の下枠材の2点の灰色砂岩のブロックに関してのみ、欠損または崩壊した元の赤色砂岩製枠材の代わりに中央祠堂と同時期に製作されてたのではないかと考えられる。

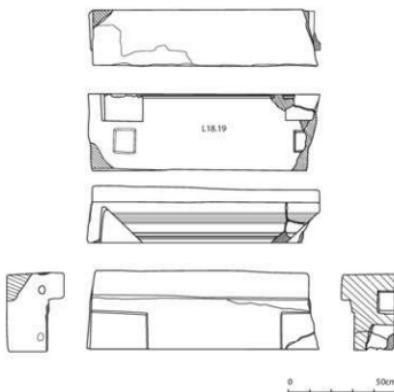
### 4. これらの赤色砂岩材はバンテアイ・スレイ寺院に属するものか？

それは不可能な考え方であるが、それは確認することができる。バンテアイ・スレイ寺院の中でもいくつかの建造物は既に倒壊しており、屏柵、窓枠、リントル、柱材やペディメントなどのいくつか石材、寺院から取り除かれたかまたは何らかの理由で消滅しているものがある。

いずれにしても、上記はこれらの赤色砂岩材の考察に関する現段階での主要な仮説である。これらの問題点を解決するためのより有効な情報を提供できるよう、今後の研究を進展させていく予定である。

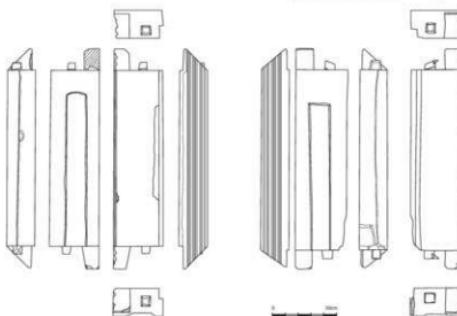
### 参考文献

- 1 Louis Finot, Inscription du Temple 486 , BEFEO, Tome XXV, Paris, 1925. p. 307-309.
- 2 Lunet de Lajonquière, Inventaire Descriptif des Monuments du Cambodge. Tome III, EFEFO, Paris, 1911. p.74.
- 3 奈良文化財研究所、2014『西トップ遺跡調査修復 中間報告南祠堂解体編』p.40-46
- 4 奈良文化財研究所、2017『西トップ遺跡調査修復 中間報告4北祠堂解体編』
- 5 奈良文化財研究所、2018『西トップ遺跡調査修復 中間報告5北祠堂レンガ遺構編』
- 6 Sok Keo Sovannara, 2017, "Draft Introduction to the Primary Study of Brown Glazed Roof Tiles of Western Top Temple",『西トップ遺跡調査修復 中間報告4北祠堂解体編』 p.23-35.



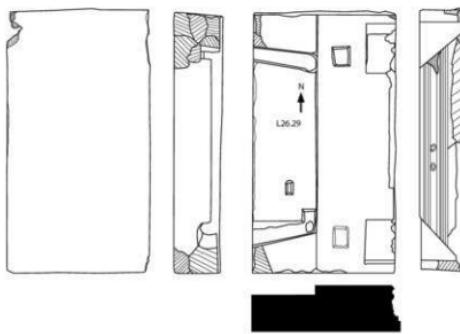
0 50cm

Fig.25 東面屏・上枠部材



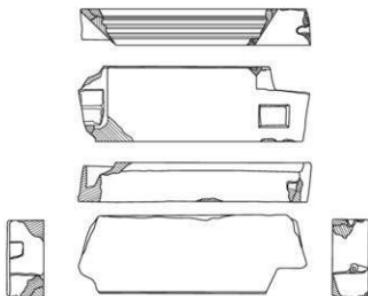
0 50cm

Fig.26 東面屏・垂直枠部材



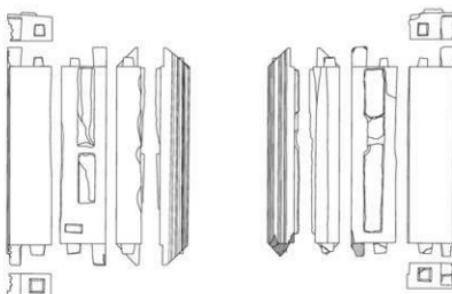
0 50cm

Fig.27 東面屏・下枠部材



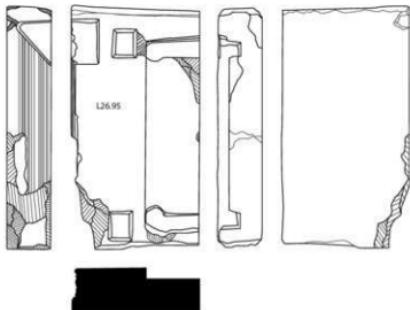
0 50cm

Fig.28 西面屏・上枠部材



0 50cm

Fig.29 西面屏・垂直枠部材



0 50cm

Fig.30 西面屏・下枠部材

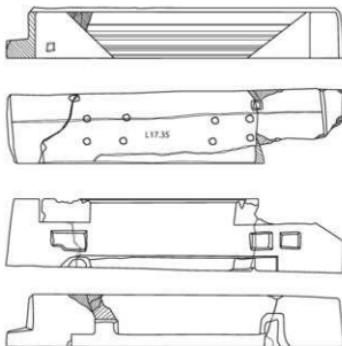


Fig.31 北面屏・上枠部材

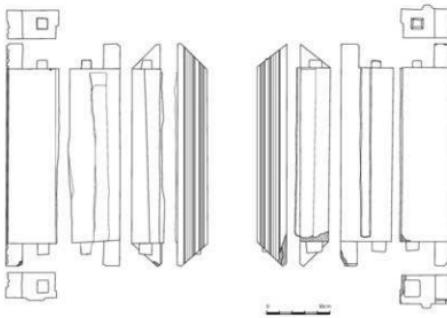


Fig.32 北面屏・垂直枠部材

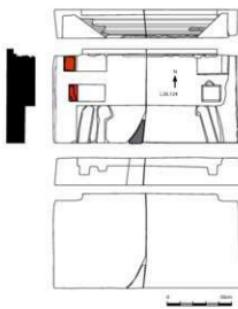


Fig.33 北面屏・下枠部材

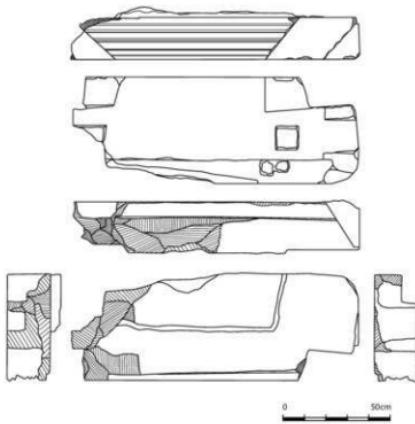


Fig.34 南面屏·上枊部材

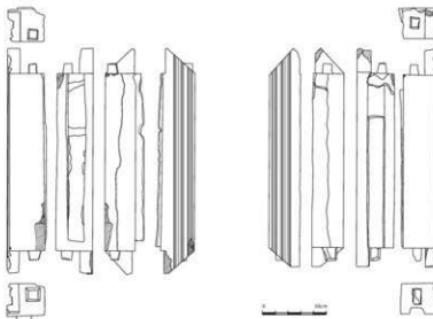


Fig.35 南面屏·垂直枊部材

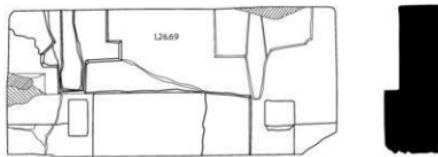


Fig.36 南面屏·下枊部材

2021年3月1日発行 発行／印刷

西トップ遺跡調査修復 中間報告 10

中央祠堂基壇部再構築編

著作権所有 奈良市二条町2-9-1  
発行者 独立行政法人国立文化財機構  
奈良文化財研究所

印刷者 アイプリコム

